

第32回

開成町福祉作文コンクール

入選作文集



社会福祉
法人

開成町社会福祉協議会

福祉作文コンクールは、「ともに生きる福祉社会づくり」をめざし、次代を担う町内在住の児童・生徒を対象に実施し、作文を通して社会連帯を基調とした福祉への理解と関心を深め、福祉活動への主体的参加意識を育成することを目的に行われております。

第32回を迎えた今回は、町内の小・中学校合せて519編の応募がありました。小・中学校別に、予備審査(校内)および町審査会を経て、優秀賞6編、優良賞4編、佳作10編を決定いたしました。

本作文集は、入選された20編の作文と開成町敬老会朗読作文の計21編を掲載しております。どの作文も、自らの体験を通じて感じたことや考えたことが作者の言葉で書かれています。この作文集が大勢の皆様の目に留まり、思いやり、助けあい、支えあいの気持ちが社会全体に広がっていくことを期待しています。

本コンクールに参加した小・中学生の皆さん、ご指導にあたられた先生方、ご家族の皆様、ご多忙のなか審査していただきました審査員の皆様に、心からお礼申し上げます。

また、ご協力いただいた、開成町教育委員会、開成小学校、開成南小学校、文命中学校の皆様にも深く感謝申し上げます。

令和元年10月

社会福祉法人開成町社会福祉協議会
神奈川県共同募金会開成町支会

審査にあたられた方々

開成町教育委員会	宇田 晃
開成町立開成小学校	細川 澄子
開成町立開成南小学校	荒野 泰宏
開成町立文命中学校	杉田 俊介
老人クラブ連合会	影山 尚
身体障がい者福祉協会	遠藤 伸一
母子寡婦福祉会つくしの会	木村 淑子
ボランティアグループぱたぱたママ	坪井 千秋
地域支援センターひまわり	大友 崇弘
民生委員児童委員協議会	碓井 尚子
開成町保健福祉部福祉課	渡辺 雅彦
開成町社会福祉協議会	高島 幸代

第32回開成町福祉作文コンクール入選作文集

小学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

この経験を生かして

開成6年 田仲里衣
たなか りい
…1

◆共同募金会開成町支会長賞◆

「ありがとう」の笑顔

開成南4年 井上心結
いのうえ こころ
…2

◆開成町教育長賞◆

人との関わりが
つながる福祉

開成6年 井戸心花
いど こな
…3

優良賞

私にできること

開成南4年 小野紗陽香
おの さやか
…4

笑顔で介護を

開成6年 小沼宥輝
こぬま ゆうき
…5

佳作

オレンジリング

開成南4年

川田 竜雅

…6

ぼくのスーパーひいおばあちゃん

開成南5年

常盤 俊平

…7

あいさつから始めよう

開成5年

橋本 瞬星

…8

ぼくができる福祉

開成南5年

近藤慎太郎

…9

私のひいおばあちゃん

開成南4年

水嶋 千陽

…10

敬老会朗読作文

福祉体験で学んだこと

開成南6年

柏木 稀菜

…11

中学生の部

優 秀 賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

二百才のおじいさん

文 命3年

大野水々紅

…
13

◆共同募金会開成町支会長賞◆

自分にできること

文 命3年

美濃島由智

…
15

◆開成町教育長賞◆

福祉制度のありがたみ

文 命3年

高須 真徳

…
17

優 良 賞

寄りそう心

文 命3年

小俣ソフィア

…
19

介護する人を支える社会

文 命3年

綾部 夢華

…
21

佳作

支え合う私達

文 命3年 橘 百々香
たちばなももか
 …… 23

「高齢者の介護」

文 命3年 井上 萌花
いのうえもえか
 …… 25

楽しく安心して暮らせる場所

文 命3年 芹澤 玲奈
せりざわれな
 …… 27

「私の祖母と現代社会を見直して」

文 命3年 井上 稜太
いのうえりょうた
 …… 29

身近にある福祉について

文 命3年 本山 愛莉
もとやまあいり
 …… 31

■ 作文の中、「障害」という言葉を「人や人の状態」を表す場合は、「障がい」と表記しています。

小学生の部

優 秀 賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

この経験を生かして

開成小学校 6年

田 仲 里衣 た な か り い

私は、一学期終業式の前日に左足を骨折しました。体が元気な時には全く気付かなかった何げない物のありがたさや逆に、不便さに気付かされました。

まず学校では移動教室の多さやトイレがせまく松葉つえが入りにくい事に気付きました。普段では松葉つえが使えないので手すりを使って上り下りするのですが、手すりが片方のかべにしかなく両方にあるばいいと思います。でも、先生がおんぶをしてくれたのでとてもうれしかったです。ただ先生は大変だったと思います。

そして夏休みに入っすぐ、両親の実家がある大阪へなやみましたが帰省しました。車で帰ることにしたので、混雑するサービエリアでは、車いすを使いました。すごいと思ったのは、身しよう者のちゅう車場です。建

物の出入り口の近くにあり、車いすが出しやすいよう広いスペースが設けられていました。そして当日は大雨だったのですが、屋根がかかっていてぬれることなく本当に助かりました。トイレも大変広く使いやすかったです。

街中での車いすの移動は、小さな段差がたくさんあり上手く進めませんでした。何より困ったのはエレベーターの少なさです。あちこち探しまわり、やっと見つけたエレベーターは明らかに必要ではない人ばかり乗っていて、何度も見送りました。なので、自分が元気な時はなるべく階段を使おうと思いました。

今回けがをして、改めてふつうの生活が幸せな事だと実感しました。車いすに乗っているとときどき変な目で見られます。その時、「あ、体の不自由な人ってこんないやな気持ちなんだ。」

と感じました。この経験を大切にして、相手の気持ちになつてみて、行動したいと思いました。

優 秀 賞

◆ 共同募金会開成町支会長賞 ◆

「ありがとう」の笑顔

開成南小学校 4年

井上 心結
いのうえこころ

「ありがとう。」私がお手伝いをする私のおばあちゃん、笑顔でこう言います。私のおばあちゃんは、障害者等級4級のリウマチと言う病気で、ほねがはいされて痛くなり、ほねの形が変形してしまっています。そのため、階段が登れなかったり、細かい作業ができなかったりします。おばあちゃんのお家には、工夫している場所や道具がいっぱいあります。階段にはリフトがついて家のいたる所に手すりがついています。ドアノブが回せないため、ドアノブに回転させるための補助器具がついています。足の変形に合わせて形を作ったほそう具（くつ）も使用しています。家では、自分なりの工夫が出来るけれど、外ではそうはいきません。だからこそ、周りの人たちが困っている人たちの事に気づいてあげることが大切であると思いました。

私のおばあちゃんがこう言っていました。「家では、痛いけど外では明るく元気にする。そうするとみんなからも、元気がもらえる。明るい言葉をかけていっしょに楽しむ。治らない病気だけど、受け入れて今の体でも楽しい事を作ろうと思っている。」それを聞いておばあちゃんの心の中はとても強いと思いました。病気でつらいけれど、病気はおばあちゃんの心を強くしたのだと思いました。

おばあちゃんの言葉で一番印象に残ったのは、「人の痛みがわかった分、人のやさしさが人の二倍、三倍うれしく感じるようになった。」という言葉です。いつも「ありがとう」と笑顔で言うおばあちゃんの気持ちがかかった気がしました。

これからは、おばあちゃんだけではなく、周りの困っている人にびん感になって勇気を出して手助けをして「ありがとう」の笑顔をふやしていきたいです。

優 秀 賞

◆開成町教育長賞◆

人との関わりがつながる福祉

開成小学校 6年

井戸 心花 いど こな

私には、93歳のひいおばあちゃんがありました。7月10日に亡くなったばかりです。

私のひいおばあちゃんは、2月から病院に入院していました。私がおみまいに行くと、大きくなったねと言ったり、手をにぎってあげると、あったかいねと言いい、手をはなしてくれないこともあるほど、よろこんでくれました。

でも、学校があるので毎日おみまいに行くことはできません。おばあちゃんは、毎日病院にひいおばあちゃんの様子を見に行っていました。ひいおばあちゃんは、危険な状態なのでもしもの時のためおばあちゃんは、遠い所に出かけることもできません。でも、私達まごと遊んだり、顔を見るだけで気分転換になりがンばれると言っていました。私がひいおばあちゃんにしてあげられることは、おみまいに行くことしかできなかったけど、ひい

おばあちゃんの介護をするおばあちゃんを元気にして支えることが、ひいおばあちゃんにつながっているような気がしました。

また、ひいおばあちゃんは入院中に認知症になってしまいました。はじめは日にちや家族の名前が分からないだけでしたが、日がたつにつれて、自分の名前や年齢も分からなくなっていました。その時どうやって関わっていいのか分からず、何もしてあげられませんでした。夏休みに福祉教室で認知症サポーターの講座があると知り、あの時、何もしてあげられなかったのが悔しかったので受けることにしました。認知症になった人は、自分がおかしくなっていることに、不安になっているので、優しく声をかけたり、手をかしたりして、認知症の人の応援をすることが大切だと知りました。私も誰かの支えになれるように、人との関わりを大事にして行きたいです。

優良賞

私にできること

開成南小学校 4年

小野 紗陽香
おの さやか

「福祉ってなんだろう。」

調べてみると「よりよく生きる。」という言葉があるそうです。でもよくわからなかったので町の福祉一日教室に参加してみました。

手話や点字の体験などいろいろなコーナーがありましたが、私が一番興味を持ったのは、高齢者体験です。高齢者体験は手や足に重りをつけて動きにくくしたり、レンズが黄色い特殊な眼鏡をかけて見えにくくしたりして、高齢者の体の感じ方を疑似体験するものです。

私には二人のおばあちゃんがいます。二人とも動きがゆっくりとしていることや、細かい事を見えにくくそうにしているのは知っていました。高齢者体験をしてみても、「そうだったのか。」と実感しました。手足の重りは動くことがめんどいになるし、指にテープを巻かれて動きにくくなるとボーチから小銭を出すにも時間がかかります。疑似体験なので私はすぐにやめられましたが、も

し本当になってしまったらいやだなと思いました。でも少しの手助けがあればもううまくいくことがあると思います。

例えば、かけ声をかけたり、大きな声でゆっくり話したりすることです。私もいつもおばあちゃんにそうしています。

「せーの」とかけ声をかけるとおばあちゃんがスムーズに動けるからです。その時これも福祉のかなあと思いました。

町の中で困っている人がいたら声をかけられたらいいのですが、恥ずかしくて私にはまだできないかもしれません。でもゆっくり待つことや、見守ることはできるかもしれません。私は私にできる事をやっていこうと思います。そうすることでみんなが「よりよく生きる。」ことができたらいなと思います。

優良賞

笑顔で介護を

開成小学校 6年

こぬまゆうき
小沼 宥輝

昨年九十七歳のひいおばあちゃんが亡くなりました。亡くなる前、介護施設や病院にお世話になっていましたが、最後は「帰りたい。」とずっと言っていた自たくで過ごす事ができました。そんな様子を見て私は介護について色々と思う事がありました。

ひいおばあちゃんは入院する前足が不自由になって、階段ののぼりおりはひざをつきながらしていました。退院してからはねたきりでした。そんなおばあちゃんの介護をしていたのは一緒に住んでいる家族でした。食事の介護をしたり、お風呂に入れないので体をふいたり、オムツの交かんをしたりと忙しく、介護以外の家事も沢山あって、70代のおじいさんとおばあさんはとても大変そうでした。

高れい者が高れい者の介護することを「老老介護」というとテレビで見ました。これは介護する人も体調を

くずしたり、苦勞や負担が多くて大変です。そこで私はどうすれば皆が笑顔で過ごせるかを考えました。

一つはサービスを利用する事です。色々な介護をしてくれる訪問サービスや、日帰りで利用できるデイサービスは、介護される人が沢山のひとふれあえるので楽しく過ごせると思います。そして介護をする家族は買い物や家事をする時間を持てる様になると思います。

もう一つは、家族や親せきが、協力を心がける事です。私は時々しか会いに行く事ができなかったけど、ねたきりで痛む体をさすったり、水を飲ませてあげる事はできました。小学生では手伝える事は少ないけど、小さな事でも皆で協力し合えば、介護する人の負担が少しずつ減って笑顔になれると思います。

ひいおばあちゃんの姿を見て、介護する人される人について考える事ができました。これが社会の進む未来が、笑顔でいられる様に、私はこれからも考えていきたいです。

佳作

オレンジリング

開成南小学校 4年

川田 竜雅 かわたりゆうが

夏休み、近所で「認知症サポーター養成こう座」があると知り、認知症について学びに行きました。

認知症には沢山の種類があつて、その中でも多いのがアルツハイマー病だと知りました。

アルツハイマー病は脳の細胞がゆっくりと死んでいき、脳が萎縮してしまうことで新しいことが覚えられなくなったり、覚えていたことも忘れてしまう病気です。例えば僕たちには便利で簡単だと思う電車の乗り方も、新しいことを覚えるのが難しくなると、自動券売機で切符を買うことも大変なことなのです。

目に見える症状は周りの人にも分かつてもらいやすいです。けれど、認知症は目に見えない病気なのでぼくたちが認知症の症状を知ることが大切なのです。

認知症の人も、その人を支える人も悩んでいます。

ぼくたちに出来ることは、見守り、困っている人がいたら優しく笑顔で「何かお手伝いすることがありますか。」

と声をかけることです。相手の言葉に耳を傾けてゆっくり対応すると、相手をおどろかせずに話を聞くことが出来るかもしれません。そう考えると子供のぼくでも話を聞くことで何か役に立つことが出来るかもしれません。

誰かの役に立てるかもしれないと考えると勇気がわいてきました。

ぼくは、認知症サポーターの証で「認知症の人を応援します」という気持ちを示す目印のオレンジリングを手につけて、困っている人がいたら声をかけてみようと思います。

佳作

ぼくのスーパーひいおばあちゃん

開成南小学校 5年 常盤 俊平

ときわしゅんぺい

ぼくのひいおばあちゃんは、九十三歳です。ニックネームは、「ベロベロばあば」です。なぜかというと、ぼくが赤ちゃんのころに、ベロベロベロとあやしてくれて、入れ歯のない口が、おもしろかったからです。いっしょにくらしていないけど、やさしくて大好きです。

六月、ベロベロばあばが転んで、足のほねが折れてしまい、入院してしまいました。ぼくは心ぞうがバクバクしました。お見まいに行くと、ベッドにねたままで、いっつもいっぱいお話ししてくれるのに、元気がありませんでした。とても心配になりました。

しばらくして、またお見まいに行きました。すると、病院のスタッフさんに支えられて、歩行器でゆっくり歩いていました。この間とは、全くちがう明るいベロベロばあばでした。病院のスタッフさんとニコニコ話していました。ぼくは、ほっとしました。

「ベロベロばあば、がんばれ。」

と、ぼくは、応えんしました。病院のスタッフさんは、やさしく声をかけて、ゆうどうしていました。そのおかげで、みるみる元気になっていききました。ベロベロばあばは、病院のスタッフさんに何度も、

「ありがとう。すまないね。」

と、言っていました。大変な仕事だけど、人にやさしくするっていいなと思いました。

退院後、ぼくの野球の練習を見に来てくれました。

「しゅんぼう、がんばれ。」

と、今度は、ベロベロばあばが応えんしてくれました。すぐに、イスを差し出してくれた友達のお母さんたち。人にやさしくするっていいなと、また思いました。

ぼくもやさしくできる人になりたいです。

佳作

あいさつから始めよう

開成小学校 5年

橋本 瞬星
はしもとしゆんせい

ぼくは、習っていたダンスの発表会を、しょうがい者施設でしたことがある。そこには、体が不自由でねたきりの車イスの人たちが、たくさんいた。ぼくは、少しとまどってしまった。なぜなら自分とはちがうと思ってしまうからだ。みんな体が、不自由になりたくてなったわけではないのに。

その気持ち小さなかべを作り、大勢の人が、そう思うことで大きなかべになってしまったと思った。その小さなかべをなくすには、「あいさつから始めよう」が、ぼくにできる最初の一歩だと思った。あいさつはだれもが気持ちよくなれるし、コミュニケーションをとることができるからだ。

ぼくは、施設にいた体の不自由な人を町で見かける事はほとんどない。施設に入り限られた場所で生活しているからだと思った。

あいさつをキッカケに、手助けをしてあげられる輪が広がれば、体の不自由な人も、もつと町にでて生活できるようになると思う。

住んでいる家の近くに体の不自由な人がいると分かれれば、近くを通った時に気にするだけでもちがうと思う。

ぼく一人から二人、三人の人が手助けしてあげれば、みんなが住みやすい町になると思う。

ぼくは、あいさつをキッカケに、小さなかべをなくしていけるよう、だれにでも声をかけられる人になりたい。

佳作

ぼくができる福祉

開成南小学校 5年

近藤 慎太郎
こんどうしんたろう

ぼくの祖母は、和歌山県の日高川町というところに住んでいます。大和川に囲まれて、開成町よりずっと田舎で、少子高齢化が進んでいる地域です。そこで、祖母は地区の民生委員をしていました。遊びに行くと、よく、「ちょっと、弁当配りに行ってわ。」と出かけるのを目にしました。

話を聞くと、同じ地区の一人暮らしの高齢者へ、お弁当を配達したり、様子を見たり、町からのお知らせを渡したりしていたとのことでした。祖母は、大休週に一回、五、六人の高齢者の家を回っているそうです。

高齢者は、祖母が来て、お弁当を食べるのが「唯一の楽しみ」だと話していたそうです。祖母も、「民生委員は大変やけど、やってよかったよ。地区のお年寄りとながれて、頼りにされてうれしかったわ。」と、ぼくに話してくれました。

祖母は、よく開成町に来ます。来たときはいつも、

「この辺は子供が多くてええなあ。子供の声聞くだけで元気になるわあ。」と、言います。

ぼくは、ぼくの祖父母や高齢者に元気に長生きしてもらいたいです。そのために何かできることはないかなと考えました。僕は祖母のように、車を運転してお弁当を届ける事はできません。でも、あいさつをしたり、手紙を書いたりすることはできます。ぼくも、祖母のように、近所の高齢者とながって、元気をあげられたらうれしいです。開成町は子供が多いので、子供達と高齢者もつとつながって、元気いっぱい町の町になるといいと思います。

そして、ぼくの祖父母に、ぼくの元気な声や顔を届けて、元気に長生きしてもらいます。

佳作

私のひいおばあちゃん

開成南小学校 4年

水嶋 千陽
みずしまちはる

私には、ひいばあちゃんがあります。今年九十一さいになります。足が悪くて、あまり歩けません。目も悪いけど、元気です。私がひいおばあちゃんの家に行くと、よろこんでくれます。昔のことなどを聞くと色々教えてください。

今は、週三回、デイサービスに行っています。お風呂に入ったり、算数の計算をしたり、歌を歌ったりしているそうです。前は、折り紙で季節の花や果物を折っていて、私にも教えてくれました。けれど今は、目が悪くて、折り紙が折れません。算数の宿題があるそうで、とても大変だそうです。

ひいおばあちゃんが元気でいられるのも、デイサービスや、そこで働いているヘルパーさんたちが、ひいおばあちゃんの手助けをしてくれているからだと思います。また、デイサービスに通っているお友達と一緒にすごすことで、楽しい時間をすごしているのだと、ひいおばあ

ちゃんの話聞いて感じました。

社会には、私のひいおばあちゃんをふくめて、たくさんのお年よりがいます。そのお年よりたちが、生き生きと毎日楽しく生活できる社会であってほしいと思います。こまっっているお年よりを見かけたら、何か役に立てることはないか、手助けできることはないか、自分から声かけられる人になりたいです。

私は、ひいおばあちゃんが好きです。ひいおばあちゃんに、長生きしてもらえるように、たくさん会いに行つて、色々なお話を聞きたいです。

敬老会朗読作文

福祉体験で学んだこと

開成南小学校 6年

柏木 稀菜
かしわざきら

私は、去年福祉体験に行き、お年寄りの方と話をしたり折り紙を折ったりしました。そこで、二つのことを学びました。

一つ目は、勝手な思いこみはせず、一度話してみるということです。私は、正直、お年寄りの方とは話が合わず話しても楽しくないと思っていました。しかし、それはちがいました。自分の知らなかったことを教えてもらったり自分の経験をときおり入れながら話すと、とっても楽しくお話することができました。たとえば、共通の話題がなかったりどちらかがずっと話していたとしても、相づちを打ったり感想を言ったりすれば相手はしっかりと、話を聞いてくれてうれしい気持ちになります。また、自分は新しいことが知れてよかったという気持ちになるので話すということは大切だと思います。

二つ目は、協力することの大切さです。折り紙で開成町の花であるあじさいを折りました。みんなで折ったも

のを集めて大きなあじさいを作り青むらさき色の画用紙にはって看板を作りました。お年寄りの方々からアドバイスをいただいたのでとてもすてきな作品になりました。一人で作った作品よりみんなで協力した作品の方がよりうまくなるなど改めて思いました。そして、私の身の周りで支えてくれる人に感謝したいなと思いました。これからも協力したり支えてもらったりしていることを当たり前だと思わず感謝して、自分も周りの人と協力し、支え合いたいと思います。

中学生の部

優 秀 賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

二百才のおじいさん

文命中学校 3年 大野 水々紅

おおの なないろ

「俺はもう百八十才だからな。あつ違うな。二百才超えたんだったな。」と笑うおじいさん。「そうですね、二百才超えましたね。お疲れ様です。これからもお元気でよろしくお願いします。」と笑う母。「え？二百才ないでしよというかママ、笑っちゃ失礼でしょ。」と思う私。思わず、「ママ笑っていいの？」と聞いた私に母は、「え？なんで笑ったらいけないと思ったの？」と聞きました。

私は、小学生の頃から社会福祉施設で、訪問演奏のボランティア活動が続けています。中二の春休みからは、母の勤めるデイサービスにもボランティアで行っています。二百才を超えたおじいさんには、ここのデイサービスで出会いました。初めて見た私を、「かわいいいじやな

いの。」と言い、とても優しい笑顔で迎えてくれた方です。私が近くを通ると必ず「かわいい子だな。」と言ってニコツとしてくれます。その笑顔は本当にとても優しくて、甘いチョコよりもソファに横になるよりも、私の疲れを取りいやしてくれるのです。

ある日、職員の方が母に、二百才のおじいさんのことを話しているのを聞きました。「すごいんだよ、短期記憶ないからいつもすぐ忘れちゃうのに、なないろちゃん」が部屋から出てしばらくして入ってきたときに、あ、さっきのかわいい子だよな、って言ったんだよ。びっくりしちゃった。」と言っていました。

私は、短期記憶というのが分からなかったので帰宅後、母に聞いたら一冊の本を渡されました。読んでみると、短期記憶とは、感覚器から入った情報を繰り返し頭の中で唱えないと十五秒から二十秒程で忘れてしまうもの、と書いてありました。そして更に、デイサービスに来ている方全員が認知症であることも母から聞きました。認知症とは、成人になってから起こる認知機能の障害のために通常の日常生活に支障をきたした状態、と書いてありました。とても興味深かったのは、認知症の人とのコミュニケーションに大切なことは共感的に受け入れる、ということです。これは、その人が考え思っているの。」

る現実を否定するのではなくさまざまな現実があることを認め相手の立場になって考えるという意味です。

この本を読んだことで、少し不思議に感じていた母や職員の方々の話し方や対応の仕方が、全て正しく学ばれたものなのだと気付きました。私がああとき、二百才と言ったおじいさんを笑ったらいけないと思ったのは、

「二百才なんてありえない、何言ってるんだろう」と思ったからで、おじいさんの心に寄りそっていなかったのだと気付きました。私は、おじいさんの今いる時間を、共に過ごせていなかったのだと気付きました。そして、笑うということの大切さと難しさにも気付きました。笑いと失礼になるかもしれないし、笑わないのも失礼になるかもしれません。でも、相手の心に寄りそい同じ時間を共に過ごせるようになれば、自然と、自然な笑顔や笑い方ができるのだと思いました。

私は今、しっかりとした目標があります。通学には二時間近くかかりますが、私立高校の福祉科に入学することです。理由は、在学中に介護福祉士の国家資格を受験することができるからです。ずっと介護職をしてきた母の楽しそうな姿や、ボランティアを続けてきて見たことや知ったこと、そして何よりも、おじいさんやおばあさんの優しい笑顔が、私にこの道を進むことを決めさせてくれました。

この先、すごく大変と思うこともあるかもしれませんが、私はおじいさんやおばあさんのたった一言の「ありがとう」や笑顔には、疲れた体や壊れそうな心を回復させてくれる不思議な力があることを知っているので不安はありません。今、私がたくさんの人に支えられているように、私もたくさんの人に支えられる介護福祉士になりたいと思います。

優 秀 賞

◆共同募金会開成町支会長賞◆

自分にできること

文命中学校 3年

美濃島 由智 みのしま よしとも

夏休みに入る前、ASOBI隊という団体から競技かるたのデモンストレーションをやってもらえないかと声をかけてもらった。ASOBI隊は、「長期休暇中の子供たちの遊びと学びをサポート」を掲げて活動しているボランティア団体だ。マンションに掲示されているチラシで流しそうめんなど楽しそうな活動をしていることを知っていたので、僕は二つ返事で受け入れた。

競技かるたは、百人一首の上の句を聞いて下の句を取るという競技で、どちらが速く取れるか、そのスピードを競う。僕は同じかるた会の友達と普段より少ない枚数でデモンストレーションを行ったが、参加した子供たちはみんな興味津々な様子で食い入るように見学してくれていた。デモンストレーションの後には、競技かるたを体験したことのない子たちでも出来るような簡単なルールを設定し、三人一組のグループ別での対戦をして遊んだ。

百人一首のかるたを初めて体験する子も多かったが、ルールを頑張って理解しようとしている一生懸命な姿や、札を他の友達よりも速く取れた時の嬉しそうな笑顔を見て、自分もとても嬉しい気持ちになった。自分の好きな競技かるたを紹介することで、子供たちの新しいことに挑戦したいという好奇心を引き出してあげられたと感じたし、普段なかなか接することのない子たちと楽しく過ごすことが出来、達成感を覚えた。自分も小学生の時に参加していた子供会では普段接することのない地域の大人の方との触れ合いの中でたくさん楽しい経験をさせてもらった。夏祭りや山車のおはやし太鼓を教えてもらったり、ドッジビー大会で他学年の子と協力する喜びを味わったり、敬老会では大喜利(笑点)を披露して喜んでもらったこともある。

年齢など関係なく地域での行事や遊びを共有し合うことが「福祉」に繋がるのではないかと僕は考えている。今の社会は、少子高齢化が進み、家族の形も変化している。自分の友達の家でも、「ちびまる子ちゃん」一家のような三世代世帯よりも、「クレヨンしんちゃん」一家のような親と子供からなる核家族世帯の方が多いように感じる。両親とも働いており、長期休暇中に家で一人で過ごす子も多いようだ。そんな子たちを地域の人がASOBI隊などの場を設けて見守ってあげること、子

供は安心して遊ぶことが出来、いろいろな体験をする中で幸せを感じることができると思う。

「福祉」とは、しあわせやゆたかさを意味する言葉である。今回僕は、自分の好きな競技かるたを通して、福祉に関わることが出来たと思う。福祉というものは、中学生の自分にはあまり関わることのないものだと思っていたけど、身近なところに僕でもできる福祉があった。これからもいろいろな事にチャレンジして豊かな経験を積んでいくことで、また福祉に役立ちたいと思う。また、自分に出来ることで周りの人としあわせを共有出来るように、積極的に行動していきたいと思う。

優秀賞

◆開成町教育長賞◆

福祉制度のありがたみ

文命中学校 3年

高須 真穂
たかすまきのり

“ お子さんととってあなたの代わりはいません。あなたの御両親には私達がいます。どうぞ社会を頼って下さい。 ”

僕が小学校に入学したばかりの頃、祖父が倒れて、母が毎日、東京の病院まで通っていたところに、祖父母の近所に住む民生委員の方が母に下さったお手紙に書いてあった一文だ。僕達家族はこの言葉にとっても救われた。

当時、祖父は統合失調症の祖母の介護に限界を感じたのか、何度も母に電話で助けを求めている。母は僕の小学校入学の準備で忙しく、僕の小学校生活が落ちついてから手伝いにいけばいいと呑気にかまえていた。しかし、祖母の介護のつらさに耐えかねた祖父は、マロリーワイズ症候群で倒れてしまった。

救急隊員からの突然の電話に、母も気が動転したまま出発、病院にかけつけたが、祖父の出血はとまらず、何

日も危篤状態が続いた。母は病院の祖父と実家の祖母の介護でほとんど自宅にいらなくなってしまうた。

入学して間もない一年生だった僕は、学校生活での新しい発見や選抜リレーの選手になったことなど母に話したいことが沢山あったが、伝えることすら出来ない日々が続いた。まだ幼かった僕は淋しさを感じることもあったが、忙しい母を邪魔してはいけなくと我慢することも少なくなかった。

ある日、母は手紙を下さった民生委員との面談に行った。祖父母は老々介護で手いっぱいだったにも関わらず、地域の民生委員、福祉課の方々が生活に介入するのも嫌がっていたそう。手をさしのべてくれる安心感を抱く母をみて、ありがたいと僕は感じ、また母もとてもありがたかったそう。その日から、たくさんの手続きや書類の記入を経て、命をとりとめて退院してきた祖父とヘルパーさん、母や僕達で、祖父の日常生活をサポートする日々が始まった。

買物は手伝うだけではなく、買ったペットボトルのふたは握力のない祖父のために緩めて冷蔵庫に入れておく、布団のカバーはずれにくいよう糸で縫いつけておく、など、僕達が気付かない日々の小さな不便を快適にする気配りをヘルパーさんにはたくさん教えてもらっ

た。病み上がりで不安そうだった祖父の顔の笑顔も戻ってきた。

そして、祖父宅に通って下さる信頼できるヘルパーさんのおかげで、母と小学一年生だった僕との会話の時間も増えていった。

祖母は祖父には介護不可能な障害があったので、ケアマネージャーにアドバイスを受けながら施設の体験入居を納得いくまで行い、最終的に一番祖母の気性にあう居場所を見つけることが出来た。

若くて元気な時には介護保険の有難みは漠然としてわからないものだが、本当に困った時、その制度から、お年寄りを助けてくれる多種多様な専門家がやってきて、応援してくれる人たちの暖かみを感じることが出来た。

人生100年時代、家族や友人以外にも頼りにしていい人がいることは心強いことだと思った。

ただ、知らなかったり祖父母のように抵抗があつてなかなかそれを利用できない人もいるのではないかと思う。又、ぼけてしまったり老眼で手続きの書類の記入が出来ないこともあると思うからです。

僕は祖父母が地域の福祉関係の方々に見守ってもらった恩を、僕の立場で自分の住んでいる地域で返してあげたいと思った。

祖父は倒れてから二年間、地域の人々に見守られながら入退院をしつつ亡くなるその日まで自立した生活をすることが出来たのだ。

この感謝の気持ちをもって、身の周りで困っている人たちに会ったら手をさしのべられるようにしたいと思った。

優良賞・敬老会朗読作文

寄り添う心

文中学校 3年

小俣 ソフィア
おまたそふいあ

「おじいちゃん、桜きれいだね。」

この声に祖父が反応してくれることはない。

私の祖父は耳の病気で耳がほとんど聴こえていない。私が小さかったころは補聴器をつければ会話ができていたのだが、年を重ねるごとに耳は聞こえなくなっていた。私はそれがすごく嫌だった。みんなみたいにおじいちゃんと話したいのに。目を見て話したいのに。祖父と私は筆談で会話している。でも私が書いた文に対して

「何が言いたいのか分からん。」

と言ってテレビを見始めたり、祖母が

『友達と出かけます。』

と書いた紙を見たのを忘れて

「いつまでたっても帰ってこない。何してるんだ！」

と怒ったりすることがたまにあった。耳の病気は手術すれば治るのに病院嫌いの祖父は手術をかくくなく拒んでいた。

私が中学生になってからというもの、祖父に会いにける時間はめっきり少なくなっていた。そんなある日、祖父は緊急搬送された。数日前から具合が悪いのは母から聞いていて何となく知っていたが、緊急搬送されるまでとは思ってもいなかった。とても怖かった。祖父の年齢から考えても祖父はもしかしたら…。悪い考えだけが頭をよぎって仕方なかった。母から

「ソフィアに話さなきゃいけないことがあるの、おじいちゃんのこと。」

そう言われたとき心臓が凍るような思いだった。一緒にパンを作ったり山にハイキングに連れて行ってくれたり小さな私をおんぶして長い道を歩いてくれたこと、あんなに嫌だと思っていた祖父はずなのに浮かんでくるのは優しい祖父、笑っている祖父、温かい祖父ばかりだった。私は気づいた、今まで祖父に話しかけても聞こえない。書いても伝わらない。そう自分の中できめつけていたこと、そうやって距離をつくって避けていたことに。

祖父は集中治療室で治療をうけていて、いつどうなってもおかしくない、ということだった。私がお見舞に行くとたくさん管につながった祖父がいた。私はそこで決意した。今の私ができるだけのたくさんすることをしてあげよう。祖父の笑った顔、元気な姿がもう一度見た

い。たくさん話がしたい、もっと一緒にいたい。そう強く思った。

家に帰ってから祖父が私宛てに送ってくれたファックスをまとめて閉じてあるものの中に私が書いた青空新聞という紙も一緒にしまっていた。何気ない日常にあったことを書き留めたものだったが、これしかない、これを作ってあげよう。と思った。

私はずっと祖父のことを自分の目線で決めつけて悲しい思いをたくさんさせてしまったと思う。祖父の目線、相手の目線から見ると世界から見えるものは大切なことがたくさんあると思う。私が寄りそって、友達が寄りそって、みんなが寄りそって：そうやって寄りそいの心が広がって軸になればもっと温かい地域、社会になると思う。そのためには相手の立場になって考えることが大切だと思う。

私もその一部として今祖父が退院したときの青空新聞号外を制作中だ。おじいちゃん楽しみに待っていてね。

優良賞

介護する人を支える社会

文命中学校 3年

綾部 夢華
あやべゆめか

二ヶ月ほど前、一緒に暮らしていた祖父の一周忌がありました。もう一年も経ったのだなとしみじみ思いました。この一年で家の環境は、とても変わったなと母を見ながら思いました。

母は、私が中学に上がった頃から祖父母の介護をしていました。母は毎朝、早く起きて家事をして、祖父母の世話もして、それから仕事に行く日々を送っていました。夜も介護、誰が見ても、自分の時間を持つことができないことは明白でした。でも、私は母のことを、気にせず、何もしてあげられなかったと思います。母は、体があまり強くなかったので、余計にストレスがたまり、疲れていたと思います。それが、祖父が亡くなるまでの生活でした。一年前までの状況を、最近思い出したのは、親を介護する子息が自殺、もしくは殺してしまう、という事件をテレビで見たからです。一年前、私が母のことをあまり気遣ってあげられなかったように、一人で介護に苦

しんでいる人を支えてあげられる社会を作っていくことが、今の日本で重要なことだと思います。

一年前から、祖母は日中、デイサービスに行っています。昼間に、家で祖母以外誰もいなくなってしまうのは心配なので、とても助かっています。二年前は、昼間は祖父と過ごしていましたが、今は色々な人と話せたり、少しでも行動範囲が広がったので嬉しそうです。デイサービスで、言葉を話す練習や歩く練習をしてもらえるのがありがたいです。たまにそこに泊まったりしているのが、母の負担も減っているようです。母はこれまでよりも積極的に行きたい所やしてみたいことを話してくれるようになりました。私は、それが、嬉しくて、実現したいなと思っています。だから、私は母に聞きました。祖母を施設に完全にあげてはどうか、と。でも母は言う方が安心できると思う、と。母は、介護が嫌という訳ではないことに私は気づきました。ただ、疲れたり、自分の時間が持てなくなったりと感じない環境ができれば、苦しくはなくなるはずです。上手く介護と付き合っているようなバランスをとれるようになったのだなと思いました。最近、祖母は一度風邪で少しの間入院しました。少しの間でしたが、歩きにくくなっていたので、十日間ほどデイサービスでリハビリをしてもらいました。リハ

ビリのできる一番近くの病院よりも近くて、よく知っている人々の周りに居られるのは、祖母にとって良かったなと思います。病院からすぐに家へ帰ってくるよりも、リハビリができたのは安心です。本当に助かっているなと思います。これからは、時間がなくても私が、母のかわりにできることをしてあげたいと思っています。

デイサービスがあるから、祖母も私たち家族も安心で
きる楽しい日々が送れていると思います。私はなにもで
きませんでしたが、母が少しでも楽になる選択をしてく
れて良かったです。これからも、このようなサービスを
たくさんの方が利用できるようにして、介護する人々の
負担が軽くなれば良いなと思います。福祉サービスが発
達した社会を作り、介護による悲しい事件を無くしたい、
と心から思いました。

佳作

支え合う私達

文命中学校 3年

橘 百々香 たらばなももか

学校への道のり、押し車を押しながら歩いているおばあさんとすれ違います。杖をついて歩いているお年寄りの姿も、よく見かけるようになりました。私の住んでいる地域では、高齢者の為の施設が増えてるように思います。時々流れる町内放送のお知らせは、お年寄りの行方不明の連絡と振り込め詐欺の注意についてです。

長いこと、日本では少子高齢化時代と言われています。以前より問題になっている二〇三〇年問題、十一年後には現在より人口は減少し、約四人に一人が六十五歳以上の高齢者になると予測されており、超高齢化社会と呼ばれる時代になります。とても速いスピードでこの状況が進んでいます。同時に出生率も下がっており、昨年は過去最低数になってしまいました。その為、私達のように若い年齢の人々の負担が大きくなり、高齢者を支えることが困難な状況になっていくのではないかと思います。

高齢化に関わる様々な問題。一つは、地方にある市町村の過疎化です。近年多く見られる豪雨災害、大地震が起きた際の避難では、過疎地域に住むお年寄りの安全な場所への移動がとても困難を極めます。

二つ目は、詐欺被害です。特殊詐欺による被害が後を絶ちません。相談する相手のいない一人暮らしは、判断力、決断力が鈍り騙されやすくなってしまうことが多くあるでしょう。

三つ目は、高齢者による車の事故です。自分で車を運転し、事故を起こしてしまうというニュースをたびたび見かけます。

こうした問題は、一人きりでは防止、解決策はなかなか見つかりません。家族、近隣の人との関わりがとても重要になってくるのではないのでしょうか。お互いを気にかけて連絡をとる。距離は離れていても、繋がっている。

先日、移動販売のニュースを見ました。レストランを経営するシェフが、空いている時間を利用して、お年寄りのお宅へ日用品、食料品を訪問販売に行くのです。いつも伺っているお宅でしたが、ある日、返事がありませんでした。このシェフは、もう少し何かできる事がなかったかと悔やまれました。定期的な訪問、声かけをする事で無事、健在であるかどうかを確認することがで

きます。この様な活動がさらに増えていくことを望みます。

以前、満員電車に乗っていると、途中から杖をついたおばあさんが乗車してきました。その方は、大きな荷物を持っていて、とても大変そうだったので私は席を譲りました。おばあさんは嬉しそうに席に座りました。すると、おばあさんが私に向かって、笑顔で「どうもありがとうございます。」と言ってくれました。とても温かい気持ちになりました。声をかける時少しだけ勇気が必要でした。「どうぞ」の一言で優しさが生まれました。

小さな行動を起こす勇氣、その一歩から互いを支え合うことができる。そうする事で誰もが幸せだと感じられる社会を作っていけるよう、皆で考えていく事が大事だと思います。

佳作

「高齢者の介護」

文命中学校

3年

井上 萌花
いのうえもえか

今年の五月、私のひいおばあちゃんは九十三歳で亡くなりました。

私のひいおばあちゃんは、数年前から寝たきりで、私のおじいちゃんがずっと介護してくれていました。トイレなど家の中の移動は車イスで、車イスに乗せることが重労働であり、七十代のおじいちゃんには、大きな負担をかけたと思います。

一方で、私の家の近所には百歳を超えるおばあさんがいます。そのおばあさんは驚いたことに一人暮らしで、雨の日はかっぱを着て毎日近くのスーパーに買い物に行きます。そして、私が登下校中によく見る姿は道端の草をむしってくれているところです。買いた物もふくめ、草むしりなどはおばあさんにとって運動なのでしょうか。また、おばあさんは私の五歳の弟に話しかけてくれたりもします。

年齢も、体の状態も違う二人ですが、二人は近くのデイサービスに定期的に通っています。デイサービスは一日介護をしてくれるところですが、私はその一日の中で何が行われているのか気になったので、調べてみました。少しでも体を動かすための、座ったままできる上半身の運動や、リフト付きのお風呂では、体が不自由で自宅ではお風呂に入れない人が、お風呂に入れたり、食事の提供があったりと、介護が必要な人の生活を支え、より快適に生活できるように設備が整っていることが分かります。

また、同じデイサービスに通っている人との、日常的な会話の中で、頭を使うことができたり、施設の人が開いてくれる、レクリエーションなどでは、体の自由がきかず、たいくつしてしまいがちな老人に、毎日の楽しみや、これからの人生の生きがいになっているのだと思いました。

調べていくうちに、デイサービスは場所や介護度によって、サービスが違ふということもわかりました。まず、介護度とは、介護される方の状態を、数字で表したものです。一から五段階の中で、数字が高くなるにつれて介護の必要性が高くなっていきます。

中には、運動など、体を動かすことを中心にしているような所や、歌を歌ったりして、音楽を使うことを中心

にしているようなところもあるようです。そして、介護度が高い方へのサービスは、入浴の手助けや、ベッドの貸し出しで、介護度が高くなるにつれて、利用金額が高くなっていきます。ですが、その代わりに一週間にあずけることのできる回数が、多かったです。

私たちにも、人を介護したり、人から介護されたりするときに、いつか来るでしょう。そうなったとき、自分が人を介護するときには、相手の立場になって、相手の気持ちを考えて行動して、自分が人から介護を受けるときには、自分が介護したときの苦勞を思い出して、介護してくれている人に、感謝を忘れないことが大切だと思います。

佳作

楽しく安心して暮らせる場所

文命中学校 3年 芹澤 玲奈

せりざわれな

テーブルを囲んで楽しくお茶を飲んだり、お菓子を食べているおじいちゃん、おばあちゃんがいました。私が部屋に入って行くと、おじいちゃんもおばあちゃんも笑顔で私に「こんにちは」と声をかけてくれました。

私の祖母は老人介護施設にいます。私は、祖母に会いに年に四、五回施設に行きます。今年の夏休みも祖母に会いに行ってきました。施設の中に入るといつもと雰囲気の違いがありました。施設の中がとても賑やかで、いつも以上に人がいました。なんだろうと思いつながら中に入っていくと、なんと施設の中で夏祭りが行われていました。焼き鳥やフランクフルト、ヨーヨー釣りなどのお店があり、子供たちの楽しそうな声もしていました。老人介護施設の中とは思えませんでした。おじいちゃん、おばあちゃんは、会いに来てくれた家族と楽しそうに過ごしていました。

私は介護施設は、介護してもらっただけの場所だと思っていたが何回か訪れるうちに、実際は違うことがわかってきました。部屋の中で過ごすことが多い入居者の為に、季節を感じる事が出来るよう、夏祭りや七夕、クリスマス会などを行ったり、季節に合った食事を出したり、外出できる人は春にはお花を見に行ったりしていました。入居者が少しでも楽しく過ごせるよう色々なイベントが行われています。壁にはその時の写真が貼ってあり、楽しそうな雰囲気伝わってきます。

私たちは、部屋に入ってからで出店を買ったポテトやフランクフルトを食べました。祖父がトロトロしたゼリーの様なものを祖母に食べさせてあげていました。「何を食べさせているの?」と聞くと、祖父が「お昼ごはんだよ。」と答えました。祖母は最近寝たきりで、自分でご飯を食べることができません。噛むことがほとんど出来なくなり、硬いものを食べることが出来なくなっていました。そのため、喉に詰まらないように、形はなにもなく、トロトロにしたものしかあげられないそうです。それでも、少しでもおいしく食べれるよう、味をかえたり、工夫をしてくれているようです。

入居者の移動手段はほとんどが車椅子です。その為、階段ではなくエレベーターを使います。認知症の方たちが勝手に出て行かないよう、エレベーターは暗証

番号を押さないと乗ることができません。トイレの中にも緊急ボタンがあります。この様に施設の中は、少し入っただけでも安全を考えた設備がたくさんあります。老人介護施設は、入居している人々が楽しく、かつ安全に安心して過ごせるように考えられている場所なんだと私は思いました。

祖母は寝たきりで、話すこともなくなりました。でも、私はまた冬休みに会いにこようと思います。みんなで祖母を囲んで写真をとりたいです。

佳作

「私の祖母」現代社会を見直して」

文命中学校 3年 井上 稜太

いのうえりようた

私の祖母は、六年前に手術をしました。私はその時、三年生だったので祖母が手術するのがとても心配でもあり怖い思いもしました。

私の祖母は、左人工関節の手術でした。十時間ほどで手術が終わりしました。手術後の二、三日は中々体のバランスが取れず歩くのすら困難でした。ですがそれからのリハビリによりだんだんと体のバランスもとれていき、杖はつきながらではありますが、歩けるまでになりました。手術をしてから約一カ月ほどで退院することができました。

そして退院してからも祖母は家の廊下で何度も何度も杖を持ちながら歩く練習をしていました。その時私は、祖母が一生懸命頑張っている姿に心を惹かれました。一ヶ月前に手術したばかりなのに、これだけ歩けるなんてびっくりする所か驚きが隠せませんでした。祖母と久し

ぶりに外出したとき、おばあちゃんは杖をついて一生懸命歩いていました。たまに私が、

「バーバ、大丈夫？」

と言うとにつこりした顔でこっちを向いてくれたり、

「大丈夫だよ、ありがとうね」

と、返事を返してくれます。もし上り坂があった場合は、私が祖母を後ろから押してあげたりして少しではありますができるだけ祖母の役に立てられるよう日々心がけたりもしています。祖母の手術から一年、二年、と日が経っていくと足が回復してきました。三年から四年が経つと杖なしで歩けるまでになってきました。今では、毎朝早起きをして近所の周りを元気に歩いています。今祖母の年齢は八十三歳です。私が二十歳になった時は祖母は八十九歳ですが、まだ今よりも元気になっていた事は信じています。祖母は私の成人式を見たいと言っていました。人間と言うものは誰もが「衰え」と言うものに行き着いてしまします。ですが、衰えを感じたとしても、そこからどのようにして元気と言う言葉にたどり着くのかを考えることがとても大切だと思っています。衰えは自分自身で感じられない人も多いと思います。なのでどれだけその周りにいる一人一人がサポートを出来るかが、一番大切だと思います。人間と言うものは、「命」はもちろん一つしかありません。その一つしかない命をどのようにに

使っていくのかを考えていくことが大切です。そして自分の命が誕生するのは家族とのつながりです。もし母が産まれていなかったら、もちろんの事私は今ここにいないでしょう。その事をあらためて考えてみると家族のつながりは、みなさんもすごい事に気づくと思います。

このような事をふまえ今の世間を見返してみて下さい。今の世の中は全員ではもちろんないですが「死ね」と言う言葉を簡単に使ってしまったています。もつとひどいと殺人と言う事が簡単に起きてしまっています。私は殺人のない現代社会をつくりたいと思っています。そのためには一人ひとりがもう一度見直す事が大切です。自分は大丈夫と思っている人もよく自分をみつめ直し、なにか一つでも自分の悪い所が出てくると思っています。

なのでこれからは、今自分のしている事は正解なのかを良く考え行動を出来ればいいなと思います。

佳作

身近にある福祉について

文命中学校 3年

本山 愛莉 もとやまあいり

福祉とは人が人らしく生命を維持し、生活をゆたかに発展させようと求めるものが、幸福の具体的な内容です。幸福を求めるのは人の権利です。「福祉」と聞くと高齢者や障がい者を対象にした何か特別な事のように思うことが多いですが、「福祉」とは、「幸福」と同じ「しあわせ」という意味の言葉だそうです。私もそういうイメージを持っていました。でもこの話を聞いて「福祉」は私たち全員に関係のあることなんだなと思いました。

私は以前、駅にいた時について点字ブロックにそって歩いている人がいました。慣れているのかスムーズに歩いていた。でも見ている私からしたらとても心配でした。都会に行くと、最近では落下防止のためにホームドアという柵がありますが、私たちの駅にはありません。やはりそういう機械があった方が事故も少なくなると思います。また、たまに点字ブロックの上に自転車を置いてある人がいたりします。この行為は大きな事

故にもつながるのでやめた方がいいと思いました。目の不自由な人はどのように行動しているのか調べてみると、信号が青になると音が鳴る、音響信号機や、建物全体のつくりや今いる位置の案内、エレベーターのボタンの説明、危ないところで注意を呼びかける点字案内と言う凸を付けることで立体的にわかるようにしている物があります。これらは全て目の不自由な人たちにとって便利なものだともっと増えていけばいいなと思いました。また車いすの人などがよく使う、多目的トイレにもたくさん工夫がされていることに気づきました。車いす利用者の設備については、まず、便器周りは車いすですムーズに方向転換ができるように、十分なスペースがあります。横の壁には手すりが付いています。また、トイレによつては、便座の部分に背もたれや肘掛けが付いている場合もあります。背もたれや肘かけがあることによつて、楽に座ることができます。さらにドアや手すりと便器の位置関係が、車いす利用者にとっては重要なポイントになると思います。また鏡は、低い位置からもみえるように傾いてつけられています。個々の体の状況によつて、適切な位置が異なるのでできるだけ多くの人が使いやすいような配慮が必要となるのです。また病气や事故などによつて消化管や尿管が損なわれ腹部にストーマと呼ばれる人工肛門などをつけている人は、腹部の排泄口

に付けられた袋に排泄物を溜めます。なので溜まった物をトイレに流さなくてはけません。その時に、シャワー洗浄で楽に洗い流すことができます。その他にも赤ちゃんのためのオムツ交換用ベビーシートがついていることも多いです。転落防止のベルトがついていたり、折りたたみ式になっていて物が多いので使用したあとに収納できるのでとても良いと思いました。

私たち一人一人の個性を生かすために普段意識して行動したいと思いました。

